

言葉の起源

——ヘルダーの『言語起源論』について——

芦 津 丈 夫

(一)

およそ存在するものには始めがあつたとされる。始めがあつたと考えられるからこそ、事物の始めのあり方に関心が持たれ、生起する場もしくは源としての起源が問われて来るのである。「無始無終」と言うような世界に出喰わすなら、起源への問いも無意味なものになってしまうに違いない。印刷術の開始、あるいは国家の起源が語られるだけではない。始めへの問いは宇宙や生命などの深遠な領域にまで向けられ、ここに天地創造の神話があらわれ、「種の起源」(ダーヴィン)が追求されることになる。しかし始めとは、すでに現在から切り離された単なる過去の出来事であろうか。それは、ひとたび生起したものが存在する限り、その基底をなし、その本質を何らかの形で規定するものであらねばならぬ。それゆえ事物の起源を問うことは、取りもなおさずその事物の本質を問うことになる。

言語の起源への問いはヨーロッパにおいて古い歴史を有し、その淵源を尋ねれば遠くヘラクレイトスにまで遡

るとされている。表現や伝達の手段として人間生活に不可欠のものとされ、水や空氣のごとくなれ親しまれているものが言語である。しかも言語とは、詩的創作においては測り知れぬ創造の源となり、思考や認識を通して存在を明るみに取り出すという意味において、まさに底深い未知の何物かである。きわめて日常的なもの、自明のものであると同時につねに未知のものであり、時には「深淵」(ハーマン)とすらも感じられる言語、それ自体が謎であるような言語に対して人間が早くから「言語とは何か」の問いを投げかけ、その「起源」を解明せんとしたのも当然のことであろう。言葉というものが一体どこから、いかにして、どのような形で生起したのか？もし「創造」という行為がそこに働いたとするなら、果して何者が言葉を創造したのか、それは神か、動物か、あるいは人間自身なのか？ごく大雑把な言い方ではあるが、およそこのような問いの形式と問題意識をもって提起され、ギリシャの昔より今日にいたるまでさまざまな解釈、さまざまな論議を呼びおこして来たものが、言語の起源への問いにほかならない。

一七七〇年に懸賞論文として書かれたヘルダーの『言語起源論』(Abhandlung über den Ursprung der Sprache)は、この問いの分野においてまさに画期的な論文であった。それは、言語が神に由来するか動物に由来するかがもっぱら論じられていた当時の思想界に「人間的な起源」の立場をはじめて確固たる根拠とともに打ち出したという意味だけのものではない。むしろヘルダーの論述は、「言語の哲学」を踏まえ、生き生きとした言語感覚、発生論的なあたらしい見方を通して言語の本質に迫ったという点では、最初の本格的な言語論であったとされている。ヘルダーの名が「言語哲学の祖」と呼ばれるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの先駆者として挙げられるのも、この意味においてであろう。R・ハイムのごとくに至っては「フンボルトはヘルダーの基本

思想を反復した」^①にすぎないとさえ語っている。さて、ここで言われる「ヘルダーの基本思想」とはいかなるものであったのか？彼の言語把握はどの点において「画期的」であり、他の諸説に卓越していたのか？この小論は『言語起源論』への一考察であるが、これらの問いが与えられた当面の課題である。もちろんそれと同時に、ヘルダーの省察においてなおも残される問題点があるとすれば、それを指摘し、彼の「基本思想」そのものを再検討してみる必要もあろう。ただし、本論の視点はどこまでも「言語の起源」への問いという一点にしばられている。それゆえ起源の問題を一步ふみ出て、言語の形成を論じた第二部には殆んどふれる余裕がない。まずあらゆる考察に先立ち、「言語の起源」を問うということ自体に含まれる二、三の根本的な問題を取り上げ、やや自由な立場からこれを考えてみることにしたい。

そもそも「起源」(Ursprung)とは何か。ヘルマン・パウルの『ドイツ語辞典』によれば、この語の原義は「水源、すなわち水の出所」であったとされる。つまり起源を問うとは「水源」に遡ることを意味し、言語の場合、それは必然的に過去への遡行となるであろう。ここに、最も古い、諸言語の母体をなすような言語としての「原初語」(Ursprache)の問われて来る所以がある。聖書的な解釈によるならば、バベルの塔の「混乱」以前に見られた人類の統一的な言語が原初語だとされるであろう。しかし、たとえばヘルダーが「神的な最初の言語」として古代ヘブライ語を挙げるとき、そこには原初語を神話性から解放し、歴史的事実として捉えようとする新らしい解釈がうかがわれる。原初語が少くとも過去という時間的規定を受けている以上、それはある時代、ある民族に属し、また特定の形態を具えた歴史的な言語であらねばならぬ。「ポエジーは人類の母語である。」(ハーマン)、あるいは「人類の最古の言葉は歌であった。」(ヘルダー)というような表現のみでは、たとえ原初語の本質を解

明するものであっても、その歴史的な所在を示すものではあり得ない。ヘブライ語であれ、サンスクリットであれ、とにかく一つの實在した言語、実証的な考証の対象となり得る言語が挙げられねばならぬ。ヤーコプ・グリュムの『言語の起源』（一八五一年）における課題は、K・ウルマーも言うように「原始語の具体的な規定」^③であり、インド・ゲルマン語圏内において原始語の構造を見出し、そこから現存する諸言語の形成の法則を導き出すことにはかならなかった。このような要求が強くおし出されるとき、言語の本質を問う言語哲学はしだいに実証的・科学的な言語学に変貌せざるを得ないのであろう。

Ursprung の語をさらに語原的に詮索すれば、前綴 *aus-* は分離や出現を示す *aus-* ないしは *ent-* を意味し、*Sprung* は言うまでもなく「躍出」もしくは「湧出」を示す動詞 *springen* より成っている。つまり *Ursprung* とは、「出所」であると同時に、「発出する」(*entspringen*) ところの力でもある。ここで想い起されるのが「言語とは所産(エルゴン)ではなく、活動力(エネルギー)である」^④ というフンボルトの例の有名な言葉である。神が万物を創造したと言うとき、神はその瞬間に万物を手離し、創造に働いた力を停止せしめたのであろうか。もし言語が創られたもの、すでに創造の行為の完了したものならば、言語の起源とは過去における一回きりの出来事にすぎないであろう。しかし、言語がエネルギーである限り、その源泉はいまなおわれわれの「その都度の言葉」(フンボルト)のうちにも働きつづけているに違いない。ハイデッガーの言う日常性の世界に埋没してしまった「空語」^⑤(*Gerade*) のたぐいはいざ知らず、詩人の胸から湧き出る一句一句、われわれの心底から発する生きた言葉のうちには、その都度、始源のエネルギーが呼び起され、反復されていると言うべきであろう。ここに言語の起源についての新しい解釈が可能となる。起源とは過去のみではなく、現在の事柄でもある。すな

わち最古の言語としての原初語であるのみならず、いま現にわれわれの言葉をその源より生成せしめている力なのでもある。

逆に言うなら、言語の本質を抜きにして言葉の起源を語ることとはできない。ところでおよそ言葉というものは、一義的な解釈を許さず、多くの矛盾やアンティノミー（二律背反）を自己のうちに宿すものはないであろう。一例を挙げるとして、暑いときにわれわれが口にする「ああ暑い」という言葉を考えてみたい。「ああ暑い」と叫ぶとき、人はまぎれもなく暑さと出会い、暑さと一つになるわけであるが、暑さを「暑い」という言語形象に置き換えることによって暑さを自己から切離している一面がある。より厳密に解釈するなら、「ああ」という感情語において主体と体験が合一し、反省の意識が加わった「暑い」の言葉において両者が分離されるとも言える。これを言語の働きにひそむ合一と分離のアンティノミーと呼ぶことができる。別な見方をすれば、「暑い」は暑さを明るみに取り出すとともに、言語の形象性によって暑さという根源的感情を覆いかくしている。暑さは「暑い」とともに現出しながらも、もはや「暑い」の言葉自体のうちに存在しない。単に内面の感情を表出する場合のみではなく、机を「机」と呼ぶときにも同じことが言えよう。ゲーテは「事物ではなく、しかも事物であるような事物」^⑤を「象徴」(Symbol)として捉えたが、表現性と被覆性のアンティノミーを含む言葉とは、まさにこの意味での「象徴」だと言わねばならぬ。問題はこれに尽きない。「ああ暑い」の感情表出は個から発しながらも、社会の場へと開放され、たとえモノローグであったにしろ、そこにはすでに他者が予想されている。なぜならすでに暑いときに人は「寒い」とは決して言わず、暑さに対する申し合わせの符号としての「暑い」を口に出しているからである。いかに主観的な感情であれ、ひとたびそれが言語に形象化されるとき、それが一つの客観

に高められることは厳然たる事実であろう。「ああ暑い」が文字として表現されるとき、さらに一つの局面が出て来る。ここでは音声^⑦が文字に、聴覚的なものが視覚的に置き換えられている。しかも文字とは、音声への再生をつねに可能性として孕むところの形象である。ここにも音と文字という一つのアンティノミーを容易に指摘することができるであろう。

合一と分離、表現と被覆、個人と社会、主観と客観などの様々なアンティノミーを孕む言語は、まさに矛盾と対立とから成り立つ怪物であるとの感じがする。しかし、かかる矛盾、対立のあるがゆえにこそ、言語がエネルギー^⑧として生成し、まさにその存在の根拠が与えられているのではないか。「ああ暑い」の内面には、のっぴきならぬ一つの力が働いている。それは、体験を自己のうちに呼び入れながらつき離し、無形のものを形象化し、閉ざされた個を開かれた場に投げ出すところの力である。矛盾、対立を媒介し、統一するもの、ゲートの表現するなら「極性と高昇」の原理を実現するものが言葉のエネルギーであると言える。「ああ」から「暑い」に迫る力を言語それ自体の働きとして捉えるなら、これを「分節作用」(Artikulation)と名付けることができる。エネルギーとしての言語を「発生論的」(genetisch)に定義せんとするフンボルトは、次のように語っている。「言語とはつまり分節された音声^⑨を思想の表現に高めるための、永遠に反復される精神の働きである。」これは言語ならびに人間の本性に即したいわば時間性を超えた「起源」解釈だと言わねばならぬ。自然音声「ああ」からより明瞭に音節化された「暑い」へと迫る過程を如実に示す「ああ暑い」の場合に限られず、「精神の働き」としての分節作用は、人間のすべての言葉に顕現するものである。言語は「人間存在の根元現象」^⑩(ドベック)とも呼ばれる。言語の起源を問うことは、問う者自身すなわち人間存在の根源を問うことになるであろう。

やや冗長な、序論の枠をはみ出た感の序論となったが、これは以下の考察のいわば布石として置かれたものすぎない。まず次章において『言語起源論』をめぐる時代的背景、論文成立の動機、若きヘルダーの言語思惟などの点にふれ、そこから作品そのものの検討に入ることとする。

(二)

H・A・ザルモニーはヘルダー以前に現われたさまざまな言語起源論を概観し、それを大別して三つの代表的な立場をあげている。^⑧この分類に従ってヘルダーの『言語起源論』成立の背景となった十八世紀中葉の言語起源に関する主流的な考え方を明らかにすれば、ほぼ次のごとくである。

第一は「自然説」(Naturtheorie)と呼ばれるもので、そのひとつに、言語は感情表出としての「自然の叫び声」から発生したとする立場がある。十八世紀では、フランスの感覚論者コンディヤックがこの立場を取った。動物的な発声の延長線上に人間の言語を捉えるゆえに「動物的な起源」の主張だとも言われている。古い例としてはプラトーンの対話篇『クラテュロス』において「名前」の由来が論じられ、そこで登場人物の一人クラテュロスが名前とは「物の本性」との一致に由来すると唱えているが、これもまた「自然説」に帰せしめられよう。ここでは語る者の自然(感情)ではなく、語られる物の自然(本性)に注目されるが、それも自然であることには変わりがない。Wauwau (犬のなき声)や Kuckuck (カッコウ鳥)などのいわゆる擬声語に見られる自然音声の「模倣」から言語の発生を説明しようとする考え方も、明らかにこの範疇に入るものである。第二に挙げられるのが、クラ

テュロスの自然説に反駁するヘルモゲネスの立場、すなわち言葉とは物に対する人間同志の「申し合、合、合、合、合」の符合として生れたとする立場で、これは「協約説」(Konventionstheorie)と名付けられる。十八世紀におけるその強力な主張者が、ほかならぬ『人間不平等起源論』の著者ジャン・ジャック・ルソーであった。「孤独な自然人」というイメージを人間史の冒頭にかかげたルソーは、人間が自然状態から社会状態に移行し、我と他との区劃が立てられた瞬間に、それまでの粗野な叫び声や身ぶりから「これはおれの物だ」という形で人間の言葉がはじめて現われたと説いた。二人もしくはそれ以上の人間による申し合わせという事柄を重視する「協約説」においては、何よりも言葉に具わる社会性の一面が考慮されていることを見落してはならぬ。さて第三の立場が、キリスト教的中世にはじめて登場した「神的起源説」(Theorie des göttlichen Ursprungs)である。万物が「神の言葉」による創造とされる時、ほかの何にもまして人間の言葉は神の創造をあかすものであらねばならぬ。「はじめに言葉ありき」(ヨハネ福音書)というおよそ言葉のはじめへの問いを無意味ならしめるような真理とともに、一つの新しい起源が現われたのである。十八世紀の神学者J・P・ジュースミルヒは言語の「完全性と秩序」のうちに神の理性を読み取ろうとした。ヘルダーの師J・G・ハーマンにとっては、むしろ言葉にそなわる創造性こそ神の起源をあかすものとされる。神が人間に働きかけた姿、そして今なお働きかけつつある姿が言葉にはかならない。生気あふれるヘルダーの新しい言語把握すらも、ハーマンにとっては啓蒙主義的な匂いのする「あまりにも人間中心的な」ものと感じられたのである。

ジュースミルヒ対ヘルダー、ヘルダー対ハーマンなどと言う風に十八世紀中葉のドイツにおいてはなばなく展開された一連の言語起源論争にその発端を尋ねるとき、まずその火付け役として上記のルソーによる懸賞論文

『人間不平等起源論』（一七五五年）が挙げられる。ルソーはその第一部で言語發生の問題にふれ、言語の「動物的起源」を主張するコンディヤックに自説の拠り所を求めながらも、同時に一步先んじた立場から一つの批判を投げかけたのである。ルソーのこの論文は、その翌年モーゼス・メンデルズゾーンの翻譯によってひろくドイツに紹介された。いわばこれを契機として、言語起源論争の松舞台がフランスよりドイツに移されるに到ったのである。ところでドイツ国内にも一つの発端があった。ルソーの論文に先立つこと一年、ベルリン学士院会長で、フリードリヒ大王の友人でもあったP・L・M・モーペルチュイが『人間の思考表現手段に関する論考』（一七五四年）と題する講演を行い、そこで言語生成の問題にふれた。「自然の音声と身ぶり」が「最初の言葉」であり、それがしだいに理性の働きとともに分節語に發展して行ったとする彼の所論は、あきらかにコンディヤックの影響を示すものだと言える。しかし早くも二年後に、学士院の内部から痛烈な反駁の聲があがる。同じく学士院会員であり、神学者ならびに統計学者として知られるジュースミルヒの講演『最初の言葉が人間に由来せず、ひとえに神に由来することを証明する試論』（一七五六年）がそれであった。「理性」の証しとされる人間の言葉が動物言語にもひとしい自然の音声から出て来たなどとは「あり得ない」ことだ。言語の起源は神による以外はいっさい考えられない、とジュースミルヒは神授説の立場からモーペルチュイの自然説に強い反論を加えた。さて、『試論』が十年後に印刷され、一般に公開されたとき、このモーペルチュイ||ジュースミルヒ論争は思いがけずもドイツ思想界に一大センセーションを巻き起すことになった。とりわけジュースミルヒの「神的起源」に批判の聲が集中し、文壇の大立物レッシング、ヴィーラントなどもここに加わったのである。

思わぬ事態に直面したベルリン学士院は、この内紛とも言うべき論争を何らかの形で調停し、事態を收拾すべ

き責任を感じた。そのためには、まずジューズミルヒの「神的起源」を根底から批判し、さらにそこからモーペルチユイの自然説への橋渡しをはかり得る誰かが必要である。この第三者を求めている窮余の策が、一七六九年に公募された懸賞論文にほかならない。締切日は一七七一年一月一日、審査日は同年の五月三十一日と定められ、論文のテーマは次の通りであった。「人間が自然のままの能力に委ねられていたと仮定して、言語を創ることができたであろうか？ その場合、人間はいかなる手段によって自分自身でその創造に到達するのであるか？」二つの問いからなる長たらしいテーマは、提出者側の意図と応募者への注文をはっきりと物語っている。第一の問いを肯定しなければ第二の問いに答えることができない仕組みになっているこの懸賞論題は、言語の創造者が神でもなければ、動物でもなく、その中間に置かれた第三の存在、つまり「人間」であるとの答えをひそかに期待していたのである。そしてこの難問にいどみ、しかもみごと第一位に当選したのがほかならぬヘルダーの『言語起源論』である。第一部「人間は自然の能力のままでみずから言語を創り得たか？」と、第二部「いかなる方法で人間は最も手ぎわよく言語を創り得たか、そしてその必然性は？」とは、それぞれ課せられた二つの問いに応じるものであることは言うまでもない。

一七六九年と言えば、二十四才のヘルダーが第二の故郷リガの町を離れ、より広い世界を求めて船旅に立った年である。すでに出発前に懸賞論文のテーマを自分のノートに書き写し、『旅日記』（一七六九年）で「私以上に言語の哲学を語る素質をもった人間はいない。」(N. 386)と自負するヘルダーは、すでにこの頃から執筆の決意を固め、ひそかに論文の作成に取りかかっていたものと推定される。ナントとパリに滞在し、さらにオイティーンの公子フォン・ホルシュタイン・ゴットルプに伴ってドイツ国内旅行をすませたヘルダーは、一七七〇年九月は

じめアルザス州の首都シュトラースブルクに入った。九月二十日過ぎには、止宿先ツーム・ガイスト旅館における若きゲーテとの出会いというまさにドイツ近代文学史に決定的な日付けを刻む出来事があった。ゲーテの自伝『詩と真実』第十章の叙述によれば、ヘルダーはしげしげと足を運ぶこの友人に『言語起源論』の計画を打ち明け、完成も間もない頃には美しい手蹟の草稿を一綴りづつ読ませたとされている。しかし論文の作成にはかなり難航していたようである。そもそもヘルダーが長期間シュトラースブルクに逗留した主な目的は、彼の眼病の治療にあったのだが、数回にわたる手術の成果は決してはかばかしくなかった。婚約者カロリーネ・フラックスラントとの結婚を近い将来に控えていただけに、ヘルダーの不安と焦燥はなおさらのことである。にもかかわらず、提出日もさし迫った一七七〇年十二月、ヘルダーは全力をふりしぼってこの論文に取り組み、クリスマスまでに原稿を完成してベルリン学士院の秘書あてに発送したのである。

この画期的な大論文がわずか数週間、いなヘルダー自身のいささか誇張した表現を借りるなら「十二月末の数日間」に書き上げられたなどとは、いかに天才ヘルダーを前にしても信じがたい話であろう。ここには二つの但し書きが必要である。まず第一に、十二月の短期間中に「あわただしく」作成された原稿とは、実はいくどか稿を重ねたのちの最終稿を意味している。これ以前に書かれた「少くとも」三つの異なる草稿が存在することはゾーファン版ヘルダー全集の明らかにするところであるし、さらに編集者R・シュタイクとB・ゾーフアンの推測によれば、その第一稿の執筆はすでにナント滞在の時期（一七六九年七月～十月）に始まったものとされている。（V 7）第二に、『言語起源論』に備えての構想と基本的思考を拡大して考えれば、それは処世論文『二、三の学問的言語の勉強について』（一七六四年）以来のものであったと言っても過言ではない。著作活動の開始以来、へ

ルダールの思考はつねに言語というものの解明に関わり合い、しかもその関心は時とともに言語の起源という問題に焦点をしばりつつあったのだ。

若きヘルダーの思索をそもそも言語の問題に向けさせ、彼の言語思惟にいわば形成の基盤を提供したのが、ハーマンとライプニッツの思想である。すでにケーニヒスベルクでの学生時代に——おそくとも一七七四年の春——ヘルダーは同地において十四才年上のハーマンを識り、著作ならびに個人的なふれ合いを通して、その深奥な宗教感情に根ざす文学観と言語観から多大の感化を受けていた。当時のヘルダーが心魂をかたむけて読みふけたと言われるハーマンの著作『ロゴスを愛する者の十字軍遠征』（一七六二年）には、例の「ポエジーは人類の母語である。」（II.197）の一句をもって知られる小論『美学神髄』（*Aesthetica in nuce*）が収められていた。ここでハーマンの語らんとしたものは「自然、歴史、聖書に現われる三位一体的な言葉」^⑧（ビュクセル）であり、「被造物をつらぬき、被造物に向う言葉」（II.198）としての神の創造であった。言語とは、神の創造的エネルギーが人間に顕現する「感性的な啓示」であり、「形象」や「感覚と情熱」を通して語り出るポエジーの源泉にほかならない。まさに啓示にも似たハーマンの深遠な言語観より、ヘルダーは何よりもまず言語の根底をなす「感情の暗さとその未知の詩的創造力」^⑨（カッシーラー）を学び取ったのである。一方、言語にひそむ理性の働き、つまり「分析的思考力の最高のわざ」（同上）としての言語をヘルダーに教えたのがライプニッツである。カントに学んだケーニヒスベルク時代のヘルダーは、すでにこの師を通して間接的にライプニッツの弟子になっていたと言える。リガ時代にヘルダーが恵念したライプニッツ研究を重視するドベックは、そこに『人間悟性新論』の名を挙げることを忘れていない。その第三部「言葉について」は、ライプニッツの合理的な思惟にもとづく明晰な言語

省察をわれわれに伝えるものなのである。ヘルダーは、彼の『言語起源論』に「ライプニッツ美学の衣裳」(一七七二年八月一日の書簡)を借用せざるを得なかったと、ハーマンに告白している。しかし単に「衣裳」のみならず、言語考察にのぞむヘルダーの方法、いな基本姿勢すらもライプニッツ哲学よりの借用であったと言わねばならぬ。『単子論』に展開されたあの「力」と「個性」の存在論から、ヘルダーは「歴史的・機能的な言語観察」(ビュクセル)、「発展の概念」と「事物の發生論的解明の意味」(ハイム)をみごとに取り入れたのである。具体的な裏付けとしては、生成における「種子」と「胚子内形成」にふれた『単子論』第七四章を挙げることができる。ハーマンは言語にひそむ感情を、ライプニッツは言語に働く理性を強調した。前者は言語の生起にあずかる創造的根底を、後者は生起に働く力もしくは形式を指し示すものとも言える。カッシーラーがいみじくも指摘するように、^⑩『言語起源論』におけるヘルダーの課題とはまさにこの二つの立場の統合にはかならなかった。内より迫る混沌たる感情が理性の明るみにふれる場所、逆にハーマンの表現を借りて言うなら理性が感情として啓示される場所、「天使の言葉から人間の言葉への翻訳」(二・199)がなされる地点に、言語の起源が探求されねばならぬ。それと同時に「言葉はイデーの表出、いな解明に役立つ」(『人間悟性新論』第三部一の一)という風なライプニッツの合理主義、とりわけ言語にその有用性を問う合目的性の考え方は、「ポエジーとしての言語」に立つハーマンの非合理主義によって止揚されねばならぬのである。

さて問題は、ヘルダーの言語考察がいかにして起源の解明という一点に集中して行ったかという内面的経過である。ケーニヒスベルク時代の産物である処女論文『二、三の学問的言語の勉強について』は、一つの「源初語」(Ursprache)がいかに各民族の風土や習慣を通して多様な「民族言語」(Nationalsprache)に分岐して行ったか

という、のちに『言語起源論』第二部で本格的に論じられる重要な問題にいち早くふれているが、これは発生以後の言語形成を論じるもので、直接的な「起源への問い」とは言いがたい。しかし、これに次いで「言葉と思考様式がいかに密接に結ばれているか?」(一・四)という問いが発せられている。そして、この「言語と思维」というロゴスの本質に迫る問いが、まずヘルダーの言語追求における最初の主要な観点となったのである。三篇に分けて次々と発表され、ヘルダーをして一躍ドイツ文壇の寵児たらしめた『近代ドイツ文学に関する断篇集』(一七六六—一七七年)にも、ハイムが言うように「文学の基盤としての言葉」というテーマが根本主題の一つとして盛り込まれていた。早くも『断篇集』の冒頭に、「言語と思维」の問題が「言語は単に思考の道具にすぎないのか?」という問いの角度をもって姿を現わして来る。内容的にほり下げられ、見ちがえるほど充実した一七六八年の改訂版においては、ヘルダー自身の考えが次のような表現をもって明確にされるのである。「言語は文学の道具としてのみ受け取られるべきではない。言語は容器であり、本質であり、いな学問がそれによって形成されるフォルムである。」(II. 8)「精神が肉体を生かすように、思想は言葉を生かす。」(II. 16)これは、言語を単なる表現の「道具」(Werkzeug)とみなす啓蒙主義の目的論的な見方に対するいわばヘルダーの宣戦布告を意味するものと言えよう。

しかし、ヘルダーはそれ以上「言語と思维」の問題に深入りしようとしなかった。まずこの問いを「思考が言葉を作ったのか、言葉が思考を作ったのか?」の方向におし進めるとき、ひとは厄介な「迷路」(II. 63)に踏み込まざるを得ない。このことにヘルダーはいち早く気付いていた。ここからは「卵が先か、鶏が先か」という式の永遠に果てしない議論が出て来るにちがいない。かと言って、言語と思维に同一性 (Identität) の面のみを強

調すれば、そこにはまた別の危険が待ち構えていたことだろう。それは黒白の識別もつかない、あの暗い混沌の世界であり、ハーマンが一七八四年八月八日ヘルダー宛ての書簡で述べるように、「理性が言葉、すなわちロゴスである」という真理の底に戦慄をもって感知されるあの「鍵を手にした黙示録の天使」にしか解き得ないような「深淵」を意味するであろう。(同一性の立場をとり、それに固執した晩年のヘルダーは、一七九九年の『純粹理性批判へのメタクリティーク』においてカント哲学と対決し、そのためカント自身から痛烈かつ致命的な反駁を受ける破目に陥った。)

「迷路」や「深淵」を避けた若きヘルダーは、今や「言語と思维」の問いに先立つべき、より切実な問いのあることを知る。これがほかならぬ「いかに言語が生じたか？」という言語の起源への問いであった。「樹木が根から成長するように、芸術や言語もその起源より成長する。種子のうちに植物は各部分とともに宿され、精子のうちに生き物はすべての肢体とともに宿されている。現象の起源のなかに解明のあらゆる宝庫が横たわり、それによって起源の説明は発生論的なものとなるのである。」(II. 62) ここにライプニッツの「胚子内形成」(Präformation)の思想が見事に生かされていることは、すでに述べた通りである。「何のために」(Worumwillen)という目的論的な思考を離れ、ひたすら「どこから」(Woher)を尋ねる精神——シュタイガーに言わすれば、これこそヘルダーを同時代のヴォルフ流の啓蒙主義者たちから区別するものであり、レッシングやヴィーラントにも存在しなかった新らしい物の見方なのである。^④ さて、ここで問題とされるのは、その起源をいかに追求すべきかの方法であろう。何はさて置きヘルダーの反駁するものが、ジュースミルヒの「高次の仮説」なるものであった。言語という美しい樹木を眺めたジュースミルヒは「神のみわざ」という感嘆の語を連発するのみで、いか

にこの樹木が一粒の種から成長したかという過程にはまるで無関心にもひとしい。「生成する言語」を無視した彼の方法は「あらゆる世界事象の歴史、あらゆる言語哲学にそむく」(H.G.)ものである。そしてヘルダーは、かかる言語を生成発展する有機体とみなし、発生の過程を明らかにしつつ起源に迫る彼独自の方法を「発生論的」(genetisch)と呼ぶのである。『断篇集』を書いたリガ時代のヘルダーには、すでに『言語起源論』にのぞむ基本的な姿勢がそなわり、そこに適用されるべき方法もほぼ確立していたと見るべきであろう。ナントに滞在していたヘルダーは友人のハルトクノッホに宛てて、懸賞論文のテーマが「まさに私のために与えられたような素晴らしい、大きな、真に哲学的な問い」(一七六九年十月の書簡)であると書いている。これは、ベルリン学士院の問いの角度とヘルダーの趣向との奇しき一致、あるいは彼の単なる意気どみを示すだけの言葉ではない。言語の起源への問いはまさに「私のために与えられたような」問いであった。むしろヘルダーに言わすれば、数年来の宿命的な課題、断片的にしか発表できなかった言語への省察をいまや「言語の起源」という注目の一点からまとめ上げ、これを時代に問うという絶好の機会がベルリン学士院の側から差し出されたのである。

(三)

「すでに動物として人間は言語を有している。すべての強い感情、なかでも最も強いものとされる肉体の苦痛の表現、また人間の魂から発するすべての烈しい情熱は、叫び声、音声、粗野な未分節の音になって直接に表出される。病める動物であれ、英雄フィロクテテスであれ、苦痛におそわれた時にはすすり泣き、うめき声を発す

るであろう。たとえ荒涼たる離れ小島に捨ておかれ、助けしてくれる同類の姿はおろかその形跡すらも認められず、希望の綱が絶たれたような場合ですらもそうである。」(V.5)

これがヘルダーの『言語起源論』の書き出しである。言語の発生点を審かにせんとするヘルダーは、コンディヤックと同じく、動物的な叫び声にまでさかのぼり、まず「自然音声」なるものを考察せざるを得なかった。すでにレッシングが芸術評論『ラオーコオン』において論じたギリシャ神話の英雄フィロクテテスの絶叫、彼が毒蛇にかまれたとき痛みのあまりに発したと言われる「ああ」とか「おお」の叫び声を取り上げられる。苦痛のみならず、歓喜、悲哀、絶望、怒り、恐怖などの感情に「突如として」襲われたとき、人間はその感情を内に秘めておくことができず、外部に表出する。ヘルダーの言う「人間が動物と共有する言葉」とは、かかる感情の「直接の表現」であり、そこに発せられる「粗野な、未分節の音」(wilder, unartikulierter Laut)である。母なる自然はすべての被造物に「自分ひとりで感じるだけでなく、お前の感情をひびかせろ。」(V.6)という命令を祝福として与えたとされる。なぜなら「感情の言葉」(Sprache der Empfindung)とは単に自己の感情表出であるのみならず、同時に他の同類への呼びかけであり、「すべての仲間によって共感のうちに聴きとられる」ことを予想しているからだ。「自己中心的なモノアド」ではない被造物は、この「自然音声」を通して個から社会の場に関われるのである。ヘルダーはこれを「感知する組織の自然法則」(V.11)と呼び、かき鳴らされた琴線が他の琴線に共鳴をよび覚ますさまにも譬えている。

「自然音声」とはいわば根源的な体験として魂の深みから発するひびきであり、アクセント、リズムとして働きかける力である。まずこの「生き生きとひびく言葉」があり、そこに意識や分別が加わることによってしだい

に源初的な力をなくした言葉が出て来るといふ過程を、ヘルダーは歴史的・發生論的な観点からも明らかにしている。「われわれの人工語がおそらく自然語をこれほどまでも排除してしまったのだ。われわれの市民的な生活様式と社会的な礼節とが情熱の奔流と大海とを思うがままに堰きとめ、涸びさせ、それを排水してしまったのである。」(V. 7) この近代文明に対する批判には、言語がその幼年時代から青年期、壮年期を経て老年期へとだいに老化の一途をたどるといふ『断篇集 I』に見られる「言語年齢説」(I. 151f.)の着想が顔をのぞかせている。古い言語を見ても、それが起源に近ければ近いほど、かかる「自然語」をより豊かに保有していた。古代へブライ人の哀歌には号泣と悲歎が「自然語のたえ間なき感動詞」(V. 10)として鳴りひびいている。「人類の最古の言葉は歌声であった。」「ポエジーは散文よりも古い」(V. 56)と言うときにも、ヘルダーは言語の起源を「感情のひびき」として、リズム、メロディー、アクセントを伴う音声として把握しているのである。

「ああ」や「おお」の言葉がまず音声 (Laut) であり、それから文字 (Buchstabe) に収められたものであることを想い起さねばならぬ。生きた音声の文字化によって、言葉の根源的な力と微妙なニュアンスが失われてしまふということ、ヘルダーは見逃さなかった。「自然の音声はきわめて単純である。もしそれが分節化され、感動詞として紙上に文字で綴られたとするなら、まったく相反する感情ですらほとんど同一の表現を取るようになる。弱々しいへああ、へへは切ない愛情をもらす声でもあるし、打ちひしがれた絶望の声でもある。力強いへおおは突如として訪れる歓喜ならびに燃えあがる憤怒の爆発であり、高まる驚嘆ならびに込みあげる悲しみの噴出である。しかしながら、これらの音声は感動詞として紙に記されるために存在するのであるのか？」(V. 8) 生き生きとした連関から取りはずされ、内部の生命を奪われてしまった文字とは、もはや「符号」(Ziffer) にす

ぎないとされる。

言葉において文字がいかなる位置を占めるか審かにしたヘルダーは、ジュースミルヒのいわゆる「文字仮説」(Buchstabenhypothese)を取り上げ、ここで「神的起源」に対するはげしい反駁の口火を切る。ジュースミルヒは上述の『試論』第一章において「言語に完全性と秩序の存在することを証明する」ため、ヨーロッパ諸国語に見られるあの整然たるアルファベットの文字に一つの拠り所を求めた。かくも多種多様な音声をわずか二十数個の文字によって表現し得るとは、まさに驚嘆に価する。あたかも精巧な時計を前にして時計製造人のすぐれた頭悩に感心するごとく、ジュースミルヒは二十余りの文字の背後にはかならず神の理性を読みとり、そこから言語の創造者は神であるとの結論を引き出そうとしたのである。しかしヘルダーは「この事柄は誤りであり、結論たるやなおさらのこと誤謬だ。」(V. 13)ときめつける。なぜなら「生きた音声からなる言葉」をそもそも文字に、しかも二十余りの文字に置き換えるなどという考えそのものが根本的に誤っている。人間の「自由自在な言語器官」によって作られる微妙かつ複雑な音構成を伝えるには、文字の数が音声の数よりもはるかに少く、たとえ再現できたにしても、その方法はいとも不完全である。すでにドイツ語の方言などにも、文字で捉えられない語がいくつか存在するではないか。未開人の言語(ヒューロン語、ペルー語など)になると、「完全に音節化されず、記述不可能な音声」の数がふえ、ヨーロッパ人にとって殆んど「発音不可能」な言葉すらある。言語が起源に近く、生き生きとしたものであればあるほど、音声を文字にすることが困難になるものだ。これがヘルダーの結論であった。

「神的起源」の誤謬に対する追求は、なおも手きびしく、執拗に続けられる。ヘルダーはあたかもジュースミ

ルヒの主張する「神の言葉」に対抗するかのごとく、「いわゆる神の最初の言語」である古代ヘブライ語を引き合いに出して問題の核心にせまる。原始ヘブライ語はすべてが生きた音声よりなり、記述がまったく不可能であった。これをはっきりと物語るものが「母音の完全な欠如」である。すなわち、近代語において「言葉の蝶番」とも言うべき重要な役割りを果している母音が、ヘブライ語では文字にされず、「非本質的なもの」である子音だけが記述されたのである。この不可解な現象は何に由来するものであろうか、とヘルダーは問う。

「ヘブライ人たちの発音はまことに生き生きとし、繊細に構成され、彼らの気音は靈氣をはらんだエーテルのごときものであった。だからこの気音は揮発して、文字で捉えることを許さなかった。……それは神のいぶきであり、耳を驚かせる風のそよぎであった。彼らの書きつけた生命のない文字とはもはや死体にすぎず、それは声を出して読み、氣息によって生氣づけられねばならなかった。このことが彼らの言語理解にどれほど大きい影響を及ぼしたかは、ここで語るまでもないことだ。いずれにしろ、この風のそよぎが言葉の起源というものを洩らしていることは明らかである」(V. 13f.)

「神のいぶき」、「揮発するエーテル」、「風のそよぎ」などの詩的比喩を通してヘルダーが語ろうとしているのは、文法的に言えば、ギリシャ語なら気音符号(Spiritus)を用いて表わされるあの有気音のことである。さきに「感情のひびき」と規定された自然音声が、ここではさらにプノイマ的なものとして把握されていることに注意せねばならぬ。神に近い源初語とはヘルダーにとって流動するプノイマであった。言葉の「神的起源」を固定化された文字に求めんとした啓蒙主義者ジュースミルヒに比すれば、まさに正反対の立場と言えよう。文字とは音声に比して「はるか後の」産物であり、「記憶の二、三の標識を捉えるためのきわめて不完全な試み」にすぎない。

しかるに、この文明の所産を神の創造に帰し、「不完全」きわまる代物に神の「完全性」を読みとろうとしたのが
ジュースミルヒである。「彼は神的起源どころか、むしろ動物の起源に辿りついている。」(V. 13)とヘルダーが辛
辣な言葉をあびせかけるのも無理はない。(——ここに付記すべきことが一つある。ザルモニーの指摘によれば、^⑮
言語考察の歴史において文字と音声とに明確な区別を立てた最初の人がヘルダーであった。音韻学の創始者と言
われるヤーコプ・グリムにおいてすら、その著『ドイツ文法』(一八二三年)において両者の区別は五十年前のヘ
ルダーほど充分になされていず、文字から音声を捉えるという傾向が強かった。)

ジュースミルヒ批判は『言語起源論』の全篇にわたって随所に見出されるが、ヘルダーは『試論』の著者が試
みたシラブル、語根、シノニム、抽象語などについての説明を逐一取りあげて、その矛盾を暴露している。たと
えばジュースミルヒによれば、シノニムとは神の「美」を損う「無駄な過剰」であり、最初は存在しなかったが、
のちに同一語の反復を避けるための手段として作られたものとされる。だがヘルダーにとっては、感情と具象
性をそなえたシノニムの豊かさこそ言語の始源性を物語るものであった。(V. 61) また、神から手渡された最初
の言葉は理性の働きを示す「善」「悪」「生」「死」などの抽象語であったという説に対しては、次のように論駁
する。ヘブライ人は「精神」という抽象語を風、氣息、魂などの感性語で表現している。まず感性語があり、そ
から抽象語が派生したのだ。つまりジュースミルヒは言語の生成過程を完全に倒錯しているのであると。(V.
82) 自己の「神的起源」への主張がそもそも聖書の創世記の物語りに根ざすものであることを、ジュースミルヒ
は「序文」において堂々と公言している。にもかかわらずこの慎重な統計学者は、かかる深遠広大な領域にふみ
込むことを恐れたのであろうか、「歴史的もしくは聖書的な」探究を避け、考察を「言語の内面的性質」すなわち

文法的事象の範囲にのみ限ったのである。ここには、ビュクセルも言うように、十八世紀中葉のドイツを支配した合理主義的思考なるものの実体ならびに限界がはっきりとうかがわれる。神の理性を「完全性と秩序」に還元した啓蒙主義者ジューズミルヒは、その産物とされる言語にも規則正しさと可視性のみを求め、音として働くものの、流動するプノイマ、「生成する言語」を捉えることはできなかった。フンボルト流に言うならば、彼は言語をエルゴンとしてのみ観察し、エネルゲイアとして把握することを知らなかった。ジューズミルヒの言う「神の文法」とは、実のところ人間の悟性が作った文法にすぎなかったとも言えよう。神が人間に働きかけ、歴史と自然のうちに自己を啓示する場を言語として把握したハーマンに比較すれば、同じ「神的起源」を語るにしても、言語ひいては神そのものの捉え方が違っていたのである。

(四)

魂の内部よりほとぼり出る「感情の言葉」、音を通しての自然の語りかけ、「神のいぶき」をすら感知せしめる古代ヘブライ語——冒頭に置かれたヘルダーの叙述 (p. 11) は力強く、生氣にあふれ、言語の根源に迫らんとするシュトゥルム・ウント・ドラunk的な衝動を肌感じさせる思いである。言葉における音声の重視はすでに述べたところであるが、さらに特筆すべきは、この音声が「歌声」、リズムとアクセントを伴う音の流れ、琴線と琴線との共鳴、一口で言えば音楽として把握されていることであろう。ニーチェの発想を真似て言うなら、ヘルダーはあたかも「音楽の精髓からの言葉の誕生」を説かんとするかのごとくである。「言語の最初の教師」

は耳にはかならないと語るヘルダーがまぎれもなく「耳の人」であり、「天成の音楽家」(ドベック)であったということは、彼の言語観そのものに現われていると言えよう。

さて、ヘルダーは根源性を宿す言語として先ず「人間と動物が共有する言葉」を取り上げ、それを自然音声からなる「感情語」として捉えた。次いでこの自然と感情という構成要素が歴史的言語としてのヘブライ語もしくは未開人の言語にも指摘され、その本質を規定するものだと言われたのである。しかし、これをもってすなわち「言語の起源」とするのは早急に過ぎるのではないか。動物言語はともあれ、いやくも人間の言語である限り、その生起には感情のみならず理性が、自然のみならず精神が関与すべきであろう。また「ああ」や「おお」の音声を未分節の音と呼ぶとき、それはすでに「精神の働き」としての分節作用を通した真の言語生成を予想するものと言わねばならぬ。もちろんヘルダーはこの点を充分に承知し、感情語を力説する間にも次のような慎重な但し書きをいく度かつけ加えている。「源初のあらゆる言語にこの自然音声の残りがなおもひびいている。但し、それが人間の言葉の主要構成分子でないことは明らかだ。自然音声とは本来の根ではなく、言語の根を生気づける樹液なのである。」(V) 自然語や感情語は、なにゆえ言葉の「本来の根」となり得ないのか。ここでわれわれは、ヘルダーが「動物と共有する言語」から出発し、その際コンディヤックの自然説を借用していることを想い起さねばならない。それにしても巻頭に置かれた「すでに動物として人間は言語を有している。」(Schon als Tier hat der Mensch Sprache) というテーゼ自体が、考えてみればきわめて含みの多い文章ではなからうか。ヘブライ語のごとき「原初語」の場合とは違って、「動物の共有する言語」の解明は必らずしも過去への逆行を前提とするものではない。むしろそれは人間の言語に含まれる動物的な要素を指し示すものと解すべきであろう。

「すでに」が純然と「動物として」にかかる語であるときみなす場合、「すでに動物として」は「すでに動物とみなしても」の意味であり、「動物であった時すでに」の意味は出て来ない。しかし、読者は、過去性もしくは終了性の意をはらむ「すでに」の語感によるためか、それとも動物→人間というダーウィンの進化論的な図式を頭におくためか、ついこのテーゼを「人間はかつて動物であり、その時すでに言語を有していた。」の意味に受け取りがちである。これは恐らく「すでに動物として」というコンディヤック的な発想を援用する限りそこにつきまとう宿命であろう。しかしフィロクテテスの呻吟が動物のうめき声に等置されるのは、彼が動物であったからではなく、その音声が動物的であったからにすぎない。むしろ言語とは、人間が動物性に支配されながらも同時にそれを理性によって超えるところに成り立つものと言える。今やヘルダーは、言語の「発生の正確な一点」(＜a＞)をおさえるためには、人間と動物との連続面ではなしにその非連続面、すなわち両者の相違点を明らかにせねばならぬ。それは取りもなおさずコンディヤック説(ひいてはそれを基点としたルソー説)からの訣別、つまりヘルダーの立場からのコンディヤック批判を意味していたのである。

コンディヤックが言語の起源に論及したのは『人間知識の起源に関する試論』(一七四六年)第二部においてである。ヘルダーはこの書物から、コンディヤックがいわば論述の布石として用いた「荒野に置かれた二人の子供」の例を取り出し、これを祖上にのせる。片言すら話せない二人の子供が荒野に置かれていたと仮定する。二人がぱったりと出会ったとき、まず「感情の叫び声」によって相互の意志のやり取りが交されるだろう。この出会いが度を重ねるごとに、二人はかかる感情表出に思考を結びつけることを覚え、おのずから「以前はただ本能的にしたことを反省とともにする」ようになる。そして「新しい言葉を作り、新しい音を分節し、事物を名前で

言い表わす習慣を身につける」という本来の人間的な言語形成がしだいに営まれて来る。——これがコンディヤックの論旨であった。まずこの仮定そのものが「不自然な、自己矛盾するデーター」から成り立っていると、ヘルダーは指摘する。子供が荒野に捨て置かれたら、さしずめ飢え死にするか、それとも野獣になつてしまふかである。それに、赤児ですら片言を話すのに、「合図のすべを一切知らない」子供と言うのが不自然である。それはさておき、何よりもヘルダーにとつての問題点は、人間の言語が「感情の叫び声」の延長線上に求められ、感情が言語に転化する「発生の一点」が明示されていないことであつた。逆に言うなら、起源を問われている言語が、すでに最初から前提されていることになる。「つまり言語が生成したのは、それが存在する以前にすでに存在したからだ。——この説明者の論旨の糸をいくら辿つてみても無駄に思われる。それはどこにも結び付けられていない糸なのだから。」(＜. 20) ヘルダーに言わすれば、感情的なものは、いかに拡大されようともいかに凝縮されようとも、自己を止揚し、変質せしめる何物かに出会わない限り、言語創造のエネルゲイアとはなり得ないのである。またコンディヤックが二人の子供による感情の「やり取り」(Kommerz)という形で最初から無意識的にいわゆる協約説を自己の自然説のうちに取り入れていることは、別の意味において注目されてもよい。

コンディヤックに続いて、今度はルソーが槍玉にあげられる。不思議なことに、ヘルダーは両者の立場のあいだに本質的な相異を認めていない。「ルソーは先輩にならつて自然の叫び声から出発し、そこに人間の言葉が生れるとした。」(＜. 20) という点で、この二人は結局のところ同じ地盤の上に立つものとされるのである。「動物と人間との区別」を無視したという点で両者の犯した誤謬は大同小異であるが、ただその錯誤の仕方が違つただけのことなのだ。ルソーは社会状態という新らしい場を設定することによって、コンディヤックの自然説を一

歩踏みこえた。この踏み越え方がつまりヘルダーの問題とするところなのである。ルソーは自然状態と社会状態とをとどのつまりは連続として捉えている。だから言葉が社会とともにはじまったにしても、言葉を生み出す素質はそれ以前の状態においてすでに賦与されていたと考えざるを得ない。この潜^{ひそ}んでいた「能力」(Fähigkeit)が然るべき時に表面にあらわれて現実の「力」(Kraft)となり、そこに言葉が生成した、とルソーは説明したのである。ところでヘルダーは、この「潜在的な反省」(reflexion en puissance)もしくは「理性能力」(Vernunft-fähigkeit)なる概念こそわれわれを眩惑する「似而非概念」であると非難する。「実際に用いることが能力を力に変え、単なる可能性を現実に変え得るなどとは欺瞞もはなはだしい。力がすでに存在するのでなければ、それを働かせ、活用することがどうしてあり得ようか。」(V. 33)もし言葉が現実の力であるのなら、それは人間が人間となったときにすでに発動しているはずだし、逆にただの潜在的な能力にすぎないのなら、いつまでも働かずに潜在し続けるであろう。ルソーの言う「社会」は感性を言語に、自然を精神に飛躍せしめる契機となり得ない。しかも、まやかしの概念によって「発生の一点」らしきものを捏造し、無意味な作為を加えたという点で、ルソーの誤謬はコンディヤックのそれよりも劣悪であるとすら言えよう。ヘルダーが「コンディヤックは動物を人間にし、ルソーは人間を動物にした。」(V. 22)と語る所以もここにあるのだろう。

ジュースミルヒ、コンディヤック、ルソーへの反駁を終え、ようやく自由の身となったヘルダーは、今や自己の方法によって「発生の一点」を明らかにせねばならぬ。さて、当面の課題は「人間と動物との区別」を立てることである。しかし区別には比較が必要であるし、比較には公正な視点が必要である。あらかじめ両者の相違を前提するような方法は禁物であろう。ここでヘルダーはすべての生物に共通するもの、およそ生を営む存在に不

可欠のものである「生活圏」(Sphäre) もしくは「活動範圍」(Wirkungskreis) というものに着目した。人間と動物との比較論をいわば生態学的な観点に立って試みるのである。どの動物にも、生れてから死ぬまでそこに所属する一つの空間が定められている。たとえば蜜蜂にとっては蜜を貯える巣箱が、蜘蛛にとっては虫を捕えるための蜘蛛の巣がそれである。ところで、このような狭い、限られた空間に生きる動物においては感性和表象力が「一つの場所に集中され」、またミネルヴァの技芸で巣を織りなす蜘蛛に見られるような「技術本能」(Kunsttrieb) が強くなる。反対に、活動範圍の広い動物になると、感性が分散されて弱まり、「技術」(Kunst) への集中度も低下することは、いきおい自然のなりゆきであると言える。つまり「動物の感受性、能力、技術本能は、その活動範圍の大きさと多様性とに反比例して強さと緊密性を増す。」(V. 22f) である。ヘルダーによれば、「動物言語」(Tiersprache) とは「動物種属がその活動領域内での役割りについて相互に交わす、暗い感性的な意志疎通」(V. 24) にはかならなかった。また「ここで語り、聞く主体は、生きたメカニズム、支配的な本能である。」(V. 25) とも言われる。

さて、人間はどうか？「人間は、そこで一つの仕事だけが自分を待っているというような単調な狭い領域をもたない。山のような仕事と使命がその周圍に横わっている。」(V. 24) 感覚や組織は一点に集中されることなく、その精神活動は「世界に拡散される」。それゆえ人間には動物の「技術本能」が見られず、したがって「動物言語」なるものも存在しない。「蜜蜂は蜜を吸うようにぶんぶん唸り、鳥は巣を作るようにさえずる。」動物の音声は本能であり、自然である。だが人間はこの意味において何一つ語り得ない。人間を欠如態としてとらえ、消極的な面のみを強調するかのように見えるヘルダーは、ここで次の問いを發する。「欠陥や不足が人間という種

属の特性であり得るはずはない。それとも自然はすべての昆虫にとってきわめて慈悲ぶかい母親であったから、人間にとってはいとも厳しい継母となったのであろうか？」(V. 26)そして、これに答えるものとして自然界に支配する「埋合わせ」(Schadloshaltung)の法則がヘルダーによって指摘される。たしかに自然は人間に「精密な組織」を与えず、動物に見られるような一点に凝集する鋭い本能を賦与しなかった。しかしこの欠如に対する「補充」(Ergänzung)として「より広い眺望」と「より多くの透明さ」、すなわち「自由の特権」を授けたのである。それゆえ「人類が動物に優越するのは程度の差の大小ではなく、そのあり方によってである。」(V. 28)そしてヘルダーは、この人間に独自なあり方のうちに「言語生成の必然的な発生基盤」を見ようとしたのである。

言語創造にあずかる人間の本性はヘルダーによって「積極的な力」だと呼ばれ、さらにそれは「内省力」(Besonnenheit)という言葉で捉えられた。「内省力」の語はヘルダー独自のきわめて深い意味合いのもとに用いられ、まさに『言語起源論』の核心とも言うべき重要な概念となっている。最初ヘルダーはこの「思考」の積極的な力を「理性」「悟性」「思慮」などの語で捉えようとしている。しかしそれに飽き足りずに、ことさら「内省力」という言葉をこれに当てた理由は何であろうか。まず第一に、いま将にふれんとしている人間存在の真底がこれらの語によって安易に、既成概念的に受け取られることを恐れたからであろう。何か只ならぬものを示唆する一語が必要である。第二に「内省力」とは「分割され、個別的に働く力」(V. 28)ではない。それは理性や悟性、そののみか機智、洞察、想像などの個々の精神活動として現われ、しかもこれらすべてを統一する力なのである。ヘルダーはこれを「人間の感知し、認識する本性、認識し、意欲する本性の全体的ないとなみ」(V. 28)と呼んでいる。第三に「理性」や「悟性」の語は、泥くさい、自然よりかけ離れた精神作用をややもすれば思わ

せがちである。ところで「内省力」はあくまでも感性や本能を抜きにしてはあり得ない。それは「感性および本能と関わり合う思考力の全体的規定」(V. 30)であり、いわば感性に渗透し、しかもこれを超え出る力である。ここに「積極的な力」の働く方向が出て来る。いやしくも言語の生成にあずかる力が方向も定まらぬ無規定的なものであり得るはずはない。

Besonnenheit は言うまでもなく「精神力の完全なる支配」(ヘルマン・パウエル)を示す形容詞 *besonnen* から構成された語であり、ふつう思慮、分別、慎重、自制などと訳されている。しかしヘルダーの場合、これらの訳語はいずれも不充分かつ不正確だと言わざるを得ない。*Besonnen* にまでさかのばれば「意識」とも訳せるが、これでは「積極的な力」としての感じが薄れてしまう。因みにハーマン研究家 J・ナードラーによれば、ヘルダーの *Besonnenheit* は「意識」と言うよりも、むしろ「創造力」を意味するものとされている。(ハーマン全集第六巻、五二頁) ヘルダーは「反省」(*Reflexion*)をほぼその同義語として用いているが、一応「反省」の語と区別し、しかもそこに働く力を考慮して「内省力」と訳して置いた。この意味において「感性を含めた全体としての人間に特有な、自己ならびにすべての所与に対する距離の姿勢」(一五六頁)とするイルムシャーの説明は、簡潔で、しかも正鵠を射たものと言えよう。何れにしてもヘルダーの *Besonnenheit* がライプニッツの概念 *Apperzeption* (統覚)に由来するものであることは、カッシーラーも言うように疑う余地なき事実である。

「自己に固有な内省力の発動状態に置かれた人間が、この内省力(反省)をはじめて自由に駆使したとき、言葉を創造した。」(V. 30)内省力の具体的なないしは個別的な働きが「反省」(*Reflexion*)であると言えよう。「感情のはてしなき大海」にさまよう人間がはっと反省するとき、そこに「ひとつの波」が見分けられる。「漂う夢のような諸形象」のうちに「ひとつの形象」を見分けるのも、反省作用によってである。ヘルダーは、混沌たる全体世界から一者を「見分ける」(*absondern*)ことがすなわちその対象の「識別」(*erkennen*)であり、さらに「認知」(*anerkennen*)であると述べている。またこの反省作用の生起する場所が「心」(*Seele*)だとやれている

ことにも注意せねばならぬ。精神と感性との通路とも言うべき人間の心が、感性と関わりつつ「イデーを想起する」のである。また反省は「覚醒の契機」(Moment des Wachens)とも呼ばれる。はっと目覚めることによって、我に帰り、他にも帰る。ここでは自覚すなわち他覚、内省すなわち外省である。すべての感覚を通して心にざわめきかける「感情の大海」から「ひとつの波」が現われ、新しい世界が豁然として開かれる。まさに「よく見れば薔花さく垣根かな」(芭蕉)の境地であり、ポエジーが突如として湧き出る瞬間であると言えよう。さて、この反省もしくは覚醒がいかにして言葉の生成に結び付くのであろうか。ヘルダーはこの核心の問題を論ずるに際し、まず反省作用を促す動機というものを考慮した。なぜなら感性的なものである瞬間におのずから目覚めるというようなことは考えられず、ひとつの波であれ、薔の花であれ、何らかの契機がそこには必要なのである。この契機をヘルダーは「目印」(Merkmal)と呼ぶ。もちろん「目印」と言ってもつねに目に見えるものとは限らず、耳にきこえ、手にふれるものでもあり得る。それは要するに、はっと「気付く」(merken)作用を促す「印」なのである。ヘルダーが例として取り上げた目印は「めえと鳴く羊」であった。

一匹の羊が眼前を通り過ぎる。血に飢えた狼やライオンなら、すぐさまこの獲物に襲いかかることであろう。発情した雄羊にとっては、欲望をみたすための対象にすぎない。ここでは「感性」と「本能」が行動のすべてを決定する。だから、羊に対して本能的になにも感じない動物にとっては、羊の通過はまったく無関心な出来事にすぎない。ところで人間はどのような反応を示すのであろうか？

「人間は、その羊の正体を知ろうと欲するや否や、いかなる本能にも妨げられない。感覚が彼を羊の方に近寄らせすぎることないし、羊から遠ざけてしまうこともない。羊は彼の諸感覚に訴えるがままの姿でそこに立つ

ている。白く、ふんわりと、毛に包まれて——人間の慎重にためす心はひとつの目印を探す——羊がめえと鳴く、目印が見出されたのだ。内面の感覚が働く。もっとも強い印象を与えたこの鳴き声、眼や手ざわりで感じ取られる他のあらゆる性質を引き離して外に現われ、魂の奥底にまで滲透した鳴き声が、心に留るのである。羊が再度やって来る。白く、ふんわりと、毛に包まれて——心は眺め、触れ、意識し、目印を求める——羊がめえと鳴く、このとき羊をふたたび認めるのだ。へああ、お前はめえと鳴く奴なのか、Vと心は内に感じる。心は羊を人間的に識別した。なぜなら羊を明確に、すなわち目印とともに識別し、名付けるからである。……人間は羊を鳴き声において識別した。鳴き声とは捉えられた印であり、そのもとで心はイデーを明確に想起する。——これが言葉にほかならない。人間語の全体とは、このような言葉の集合でなくして何であろうか？人間がいつかこの着想を他の生物に吹きこみ、その前でこの覚醒の目印を唇でめえと鳴いてみせようと思う、——まずこんなことは絶対に起らないにしても、現に彼の心はこの音響を記憶の印にえらんだとき、いわば内面でめえと鳴き、羊を音響において識別したとき再びめえと鳴いたのである。——言語が創り出された、人間が人間であるのと同じほど自然に、そして人間に必然的なものとして創造されたのだ。」(V. 36f.)

(五)

言葉の「発生の一点」はあざやかに、しかも適確に把握された。人間と「めえと鳴く羊」との出会い、この素朴な情景を思い浮かべてのヘルダーの描写は、実に生き生きとし、印象的である。コンディヤックの「二人の子

供」に見られたあの不自然さはどこにもない。いとも自然で、リアリティーに富み、あたかも言葉の発生という出来事がいまわれわれの眼前で生起しつつあるといった感じさえする。さて、何よりもヘルダーの叙述に力強さと具象性を与えているものが「めえ」(Bäh)の鳴き声であろう。この鳴き声がかなならぬ「感情のひびき」、すなわち人間の「ああ」や「おお」にひとしいなまの音声であることに留意せねばならぬ。コンディヤック批判を通して排除されたかのごとく見えた動物的音声がふたたび「めえ」の声でよみがえり、「言語の根を生気づける樹液」たる所以を明らかにしている。たしかに、羊の声は人間の内より発するものではなく、外から聞えて来る音声であろう。しかし、人間はこの「めえ」を耳にするとき、「内面でめえと鳴く」のである。それゆえ、内面にひびく「めえ」から「お前はめえと鳴く奴だ」という反省の言葉が生れるとき、そこには「ああ暑い」を發せしめたと同じ力が働いていると言える。感性的なものから理性的なものへ、自然から精神へと迫る言語生成のエネルギー——ここにわれわれはハーマンとライブニッツという二つの相反する立場のあざやかな統合を見出すこともできるであろう。

さらに二つの事柄に注目したい。その一つは、イルムシャーの言うように、ヘルダーによって明るみに取り出された言語の起源にそなわる「その都度的な」(jeweilig)性質である。起源とは、ルソーにおいては「孤独な自然人」から社会人への推移点に、ジュースミルヒにあつては「神の文法」が人間に手渡された瞬間に帰せしめられるものであらう。いずれの場合にも、それは時間的に制約された過去の一点を意味している。しかしヘルダーにとって「起源」(Ursprung)をあかすものは——それが「めえと鳴く羊」という状況設定に処り所を求める限り——過去ではなくしてむしろ現在であり、*jedesmaliges Sprechen* において「その都度」根

源より「発生する」(entspringen)力であつたと考えられる。「言語の起源」の追求に際し、そこに二つの可能性があることは序論において述べた。それゆえここで問題となるのは、ヘルダーにおける「原初語」(Ursprache)理解の深さ、さらに学問的な立場から言うならその客観的な信憑性であろう。たとえば、彼のヘブライ語考察がかかる言語の「現在」把握を過去に投影したものに過ぎないのではないかという意地のわるい見方もできる。案に違わず、八十年後に現われたヤーコプ・グリムの『言語の起源について』(一九五一年)は、ウルマーも指摘するように、「言語の哲学的な本質規定」を通すヘルダーの原初語把握を非学問的であるときめつけ、歴史的・文獻学的な新しい方法に基く言語学的考察の必要性を説いたのである。いずれにしろ、人間と羊との出会いという古い遊牧民の時代を思わせるような情景がわかれ、われの出来事として身近かに生き生きと感じられるのは、まさにヘルダーのこのような起源解釈を紹介するがためであろう。ヘルダーは『言語起源論』第二部において「民族言語」の発生について語っている。この場合にも、一つの原初語が風土や習慣に即してプロトトリスのごとき自在な変化をとげ、多様な民族言語を生成するという過程そのものが、かかる「その都度的な」起源という仮定なしには成り立ち得なかつたであろう。第二に注目すべきことは、言葉のもつ「合一と分離のアンティノミー」をヘルダーが言語発生場に創造的な力としてみごとに取り入れていることである。人間は「聴き、そして気付く生き物」(V. 46)だと規定される。「聴く」(hören)において人間は羊と一つになり、「気付く」(merken)において自己と羊とを分離する。「めえ」の音声は「めえと鳴く奴だ」の反省を通し、そこにはじめて「羊」という言葉の生れる場が開かれるのである。言語の創造に「耳と口との直接的な関わり合い」(III 22)を強調したハーマンと「内省力」をヘルダーに教えたライプニッツ、この両者による言語思惟が「聴き、そして気付く生き物」と

いう一語においていみじくも出会していると言えよう。

以上われわれがかなり綿密にあとづけたヘルダーの論述は、実のところ『言語起源論』の最初のほぼ三分の一を占めるにすぎない（厳密に言えば第一部の第一章と第二章）。しかし言語の「起源」を論ずる本書においてはこの最初の部分、とりわけ内省力による言語創造を例証する「めえと鳴く羊」の個所にすべてがかけられ、全体の核心とも言うべきものが織り込まれていることは、第三章の始めに置かれた「プロメーティスの天上の火花が人間の魂のなかで燃えあがる焦点が取り出された。最初の目印において言語が生成したのだ。」（Ⅴ・48）の文章によっても確認されるであろう。残りの部分において、ヘルダーは自己の起源論の裏付けもしくは肉付けとしての論証（第一部第三節の音声論、原初語ならびに文法的事象の考察）をなし、ついで第二部では主として言語の「形成」（Fortbildung）の問題に立ち入っている。すでに序論で断わったようにこれらに関する考察は割愛し、以下ヘルダーにとっての「焦点」、つまり「めえと鳴く羊」の説明から直接に出て来る二、三の問題を取り上げることにする。

まず第一に、なぜ言語生成の目印として聴覚的な対象である「めえと鳴く羊」が選ばれたかという問いが残されている。これに答えるものが、聴覚を「人間の諸感覚における中間的なもの」（Ⅴ・64）とみなすヘルダーの思考であった。「聴覚」（Gehör）は感知範囲、明確さ、強さ、作用する時間などあらゆる面から見て、「触覚」（Gefühl）と「視覚」（Gesicht）の中間に置かれている。触覚が暗く、混沌とし、すべてを内に包み、威圧的であるのに対し、視覚は明るく、すべてに距離を保ち、冷静である。この中間に立つのが聴覚であり、暗い触覚を明確な感知へと目覚めさせることによって両者を統一するものと説明された。例の合一と分離のアンティノミーから解釈

するなら、聴覚が言語生成にとって最も適切な感覚であることは明らかだ。聴覚は対象に深入りすることもないし、距離を置きすぎることもない、むしろ事物に滲透し、かつ事物から抜け出すという二重の働きを有するのである。

それでは目に見え、手にふれるだけの対象は言葉となり得ないのか、たとえば羊が「めえ」と鳴かず、「白く、ふんわりとした、毛に包まれた」ものに留まっていたらどうなるのか、という問いが即座に出て来る。この問いに対しヘルダーは、「音が人間にひびかない場合の言語」(V. 60)の項目において「類比」(Analogie)の概念を持ち出すことによって答えている。類比とは「さまざまな感覚の結び付き」であり、のちに「共感覚」(Synästhesie)と呼ばれるに至ったものの、つまり明るい音、甘い音色などという感じで現われる特異な心理現象のことである。ビーフォン、コンディヤック、ボネーなどの試みた感覚の分析は抽出にすぎず、彼らは「自然においては、あらゆる感覚の糸が一つの織物をなす」(V. 62)ということを見捨ててとヘルダーは語る。また「言語が古く、原初的であればあるほど、その根における諸感覚のアナロジーは顕著である。」(V. 70)とも述べられる。ところで、これら諸感覚の根底をなすものが触覚(感情)である。——すべての感覚に関わり合うものとされる「感情」(Gefühl)が本来は「触覚」から出た語であることは言うまでもないが、ヘルダーは Gefühl にこの二つの意味を含ませて用いている——しかもヘルダーは、感情(触覚)と聴覚との密接な結びつきを決して忘れていない。自然音声においては感情がすべて「音として」表現されたではないか?(V. 63)また原初の言葉を考えてみるがよい。われわれが「眼から散る火花」あるいは「頬の紅潮」として視覚的に捉える怒りを、古代ヘブライ人は「鼻息」として聞き、聴覚的に捉えている。近代人には「脈動」や「盛りあがり」として現われる生命が、彼ら

には「はげしい息づかい」として啓示されていた。(V. 70) ヘルダーはこの先を語ろうとせず、決定的な発言をさし控えている。しかし、聴覚こそアナロジーの根底であり、人間は音のない対象をも音として受け取り、それを言語生成の目印にしたのだ。——彼の言わんとする所がここにあったことは間違いない。

第二の問題は、言語起源論に古くからつきまとうアポリア「言葉が先か、思惟が先か」の問いにヘルダーがいかに対応したかということである。ここで言われる「思惟」とは理性とも、あるいは認識とも置きなおし得る言葉である。アウグスティヌスが『告白』で「主よ、どうか私に、知らせ悟らしめたまえ。あなたを呼びもとめる」と讃えることと、いずれが先であるかを。あなたを知ることと呼びもとめることと、いずれが先であるかを。」(第一章、一、山田晶訳)と語るとき、神を「知る」と「呼びもとめる」の形ですでにこの問いが提出されている。『断篇』時代のヘルダーが「言葉と思惟」の問いを敬遠し、起源への問いをこれに優先せしめたことはすでに述べた。しかし、およそ言語の初めを論ずる者には畢竟この難問との出会いが不可避のものであったらしい。

『言語起源論』のヘルダーにしても、宿敵ジューズミルヒとの対決において、やはりこの問題にふれざるを得なかったのである。さて、ジューズミルヒは『試論』の序文で次のように述べている。理性には言葉が不可欠の前提とされるが、この言葉そのものが悟性なしにはあり得ない。しかもこの悟性は言葉に完全性と秩序をもたらす「きわめて偉大で完全な悟性」であるから、さしずめ「神の悟性」以外のものとは考えられない。——ヘルダーはこの推論を取りおさえ、「言葉なしに人間は理性をもたず、理性なしには言葉をもたない。言葉と理性なしに人間は神の伝授にあずかれず、また神の伝授なしには理性と言葉にありつけない——こんな具合にして、われわれは一体どこに辿りつくのか?」(V. 40)と論駁する。そしてジューズミルヒの推論を「永遠の循環」(der ewige

Kreisel) だと呼ぶのである。このような悪循環が、「発生の一点」を確保するという操作にとって最大の障害となるものであることは、誰の目にも明らかである。言語の発生点に「社会」という新しい契機を置き、このアポリアを克服したかのごとく見えたルソーにしても、実のところはそうでなかった。『人間不平等起源論』のルソーは「社会が言語の導入に先立つのと、言語の導入が社会への結合に先立つのと、そのいずれが社会にとって必要であったかという困難な問題^⑨」に出喰せ、これに決断を下し得ない。つまり、ここでは「言葉が先か、社会が先か」という形で「発生の一点」に関してふたたび堂々めぐりが始まっているのである。同じくコンディヤックの言語発生論に対しても、ヘルダーは「言語が生成したのは、それが存在する以前にすでに存在したからだ。」(V. 20)との皮肉な言葉を投げかけている。つまりこれは、証明されるべき結論をあらかじめ前提としているコンディヤックの推論方式に対し、そこにひそむ悪循環を摘発したものにほかならない。

さて、ヘルダーは果してこの「永遠の循環」を断ち切ることができたのであろうか？ ヘルダーが「内省力」を先行させ、言葉をその産物とみなしていることは確かであると言える。「お前はめえと鳴く奴だ」と内面で反省するものが「内的言語」(innere Sprache)であり、それが一つの定まった形をとって外に現われたものが「外的言語」(äußere Sprache)であるとも説明されている。(V. 64) ジュースミルヒに「永遠の循環」を指摘する箇所においてもヘルダーは、「言葉はつまり理性の最初の行為からきわめて自然に出て来た」(V. 38)という風に、自己の立場を明示することを忘れていない。ところで、それに続く次の文章をわれわれはどう解釈すればいいのか？「神の伝授における最初のシラブルを理解するには、ジュースミルヒ氏自身も認めるように、人間がまず人間である、つまり明確に思考できるということが必要であった。そして最初の明確な思考のもとには、すでに言

葉が彼の心に存在していたのである。それゆえ言葉は神の伝授を通してではなく、人間みずからの手段によって創られたのだ。」(V. 40) 言葉の創造をジュースミルヒのごとく神に帰せしめず、人間の手に奪回したという点には、たしかにヘルダーによる大きな転換があった。だがこの転換のあざやかさに惑わされてはならない。「言葉」には「思考」が必要であり、しかもこの「思考」には「言葉」が必要であるという論旨だけを取り上げてみれば、これはまぎれもなく「永遠の循環」ではなからうか？ ヘルダーはジュースミルヒに向けた攻撃の刃を実のところ自己自身にも向けているのではないか？ ザルモニーに言わすれば、ヘルダーがはからずも露呈したこの矛盾は『言語起源論』において最後に至るまでついに解決を見ていないのである。反省(内的言語)から言葉(外的言語)が生れたと言うにしても、その反省が少くとも「お前はめえと鳴く奴だ」という言語的な形態を伴っているかぎり、そこにはすでに言葉が働いていると見ることが出来る。そのみか、この「すでに」に含まれる過去性を強調すれば、言葉が反省に先立っているという解釈さえ可能となる。この場合には、ザルモニーの言う「永遠の循環」を否が応でも認めざるを得ない。しかし一方、「お前はめえと鳴く奴だ」の言葉はあくまでも内的な言葉にすぎず、いまだ混沌性をはらんだ、言葉以前の言葉であるという風に理解するならば、やはり反省が言葉に先立つものとなり、「発生的一点」は確保されることになる。これがまさしくヘルダーの立場であり、彼の起源論のすべてがこの前提の上に立って展開されていることは言うまでもない。にもかかわらずこのような矛盾が呈示されたとは、彼自身もとどのつまりは「永遠の循環」から分離し得なかったのか、それとも単なる論証の不充分さ、あるいは表現の曖昧さというだけで済まし得るものであろうか。「永遠の循環」は、のちにディルタイ、ハイデッガー、シュタイナーなどによって解釈学の領域で取りあげられる「循環論証」(circulus vitiosus)の問題であ

る。E・ハインテルは『言語哲学序論』（一九七二年）においてこの「解釈学的循環」(hermeneutischer Zirkel)のためにわざわざ一章を設け、これを言語起源論との関連においても論じているが、生物学的・心理学的な方法で言語を「反省」に還元せんとしたヘルダーも結局のところこの「循環」から完全には抜け出ることではできなかったと指摘している^④。ハインテルに言わすれば、言語への問いを「経験的・個別科学的な」問いより切り離し、それを「根元哲学的な」問いとして徹底させないかぎり、「永遠の循環」はどこまでも存続するのである。われわれはこの「悪しき循環」が言語起源論にとって宿命的なアポリアであったことを再確認するとともに、このアポリアを生起せしめた問いそれ自体の根底を改めて問わざるを得ない。はたして「言葉」と「思惟」のいずれが因であり、いずれが果であろうか。言葉なしに思惟はなく、思惟なしに言葉はないことは確かである。むしろ両者は同時に生れるとも考えられる。かと言って、両者は決して同一物ではなく、あくまでも言葉は言葉、思惟は思惟である。このいずれを先とも決めがたい相即不離の微妙な関係に立つ二者を前にして、「いずれが先か」を問うこと自体に問題があるのではないか。「卵が先か鶏が先か」式の無駄な議論などいっさい放棄して、二者の相関関係をありのままに受け入れるべきではなからうか。それともロゴスの側が「理性と言葉」(ratio et oratio)という現われ方を止揚しない限り、かかる「永遠の循環」はどこまでも続くと言うべきかも知れない。いささか論に飛躍があるようだが、ゲーテは「はじめにロゴスありき」の翻譯に苦心惨胆するファウストをして「ロゴス」に対する訳語として「言葉」や「こころ」でもなければ、「力」でもなく、あえて「行為」(Tat)の一語を撰ばしめている。ヘルダーの『言語起源論』の成立を身近かに体験しながらも、その問題自体にはなんら本質的な意義を見出さなかったと告白するゲーテであるが(『詩と真実』第十章)、むしろ彼こそ「無用な」論議を超えた次元

でロゴスの核心を直観的に捉えていたのではあるまいか。

やや副次的な問題かもしれないが、「めえと鳴く羊」に関して、なぜ羊の名が「めえ」とならず「羊」となったのかという素朴な問いが残されているように思われる。念のためこの点にも一言ふれておきたい。ヘルダーがいかに音声重視したからと言って、音声すなわち音声の模倣を意味するわけではない。『言語起源論』においても模倣説の立場に反対する態度ははっきり表明されている。(V. 38) もしろん Wauwau とか Kuckuck のような擬声語も少なからず存在するが、これは語彙の全体から見ればごく一部分にすぎない。ここでもわれわれは内省力を通しての「めえ」から「お前はめえと鳴く奴だ」への転換に注意せねばならぬ。つまり、なまの音声「めえ」は内的言語においてその単なる音声的なあり方を止揚し、精神的なものに高められる。このとき、「白く、ふんわりと、毛に包まれて」などの様々な要素が自由に働きうる地平が開かれるのである。羊の名は音声通りに「めえ」となったかも知れない。しかしそれ以外にも無数の可能性が孕まれているのである。

ヘルダーの『言語起源論』は、いわば言語の場における高らかな人間宣言であった。人間とは「言語生物」(Sprachgeschöpf) にはかならない。神や動物ではなくて、まさに人間が言語創造者であるとされた。「言語の起源は、それが人間的であるかぎりにおいてのみ、尊厳なあり方で神的なものとなる。」(V. 146) とさえヘルダーは語っている。ここには、中期以後のヘルダーにおいて確立する「人間主義」(Humanität) の立場がすでに打ち出され、やがてゲーテやシラーの文学とともに開花するドイツ理想主義のイデーが予告されているとも言えよう。言語起源論の歴史においてヘルダーの占める位置、彼の言語観に見られる新しさについては、すでにいくつかの角度から指摘した。生物学、心理学にまで及ぶ考察の幅広さ、歴史的な視野、言語の本質的かつ直観的な把握、発生論的・有機体論的な方法、さらには大胆かつ鋭利なポレミックなどの諸点が挙げられよう。しかしこれらのものを可能ならしめたヘルダーの基本的な姿勢、というものを問いつめるならば、それは言語把握におけるアン

トロポロギーの確立という一点に帰着するであろう。ところで、この言語における「人間性」の強調ということ自体が究極的には一つの問題となるのではないか、これが本論における最後の問いである。

人間とは動物に比して本能において劣り、理性においては勝るものとされる。ヘルダーは言語創造にあらずかる「内省力」なるものに注目し、人間の「積極的な」一面を強く押し出した。しかしそれと同時に、人間の言語獲得がむしろ動物の満たされた状態からの脱離であり、自然からの疎外であるという消極的な解釈も成り立つのではないか。事実、人間の自然から歴史への移行を「墮落」だとみなした『人間不平等起源論』の著者ルソーがいる。彼にとって言語創造の担い手となるものは、人間の内にひそむ「完成能力」(Perfektibilität)にはかならなかった。しかしまさにこの能力の目覚めによって、本能、知覚、感情などにゆだねられていた幸福な自然人は社会へと堕ち、同情と情緒をうしない、「我と他」を区別する反省によって自己中心的な存在になり下ったのである。つまり人間は理性を働かせ、言語を創ることによって「静かな、罪のない日々が過ぎて行くはずの最初の状態」から引き離されたのだ。「罪のない日々」という発想は、明らかに「アダムとイヴの墮落」(Sündenfall)という創世記のモチーフに直結するものである。言語とはそもそも「墮落」の初めなのではないか？早くからルソーを熟読し、『断片』では例の「言語年令説」によっていわば言語退化説を打ち出してさえいたヘルダーが、この問題に無関心であり得たはずはない。これを証明するものとして、一七六八年四月のハーマン宛ての書簡がある。この重要な手紙については機会を改めて論ずることにするが、要するに、ヘルダーはここで聖書の「楽園喪失」という出来事を解釈し、それは「人間がみずからに選びとった賭」であると記している。人間が智恵の木の実を食べて善悪を知る存在となった、言いかえれば「言語生物」になったのは、決して蛇の誘惑によるもので

はない、人間みずからの決意によるものであるとされる。ヘルダーのアントロポギー、人間による言語創造という立場は、この重大な認識、いわばヘルダー自身の人間解釈にのぞむ「あれかこれか」の決断の上に成り立つものであったのだ。しかも、ほかならぬこの一点に疑惑を抱き、そこに「人間中心的な」時代精神に流されるヘルダーの姿勢を摘発したのがほかならぬ彼の師ハーマンであった。上記のヘルダーの書簡に対して、ハーマンは五月二十三日にきわめて意味慎重な内容の手紙を返答として送り、創世記のエヴァの名をことさらマリアと書き換えることによって新約聖書の「救済」の真理をのぞかせ、早くもヘルダーの人間中心主義に一打を喰わせている。やがてヘルダーの『言語起源論』が一七七二年に学士院の委託によりベルリンのフリードリヒ・フォス社より出版されるや否や、ハーマンは『言語の起源に関する二つの評論』をはじめとする一連の論文を発表して、ヘルダーのアントロポギーに対する攻撃を開始したのである。神の愛、神の人間への「へりくだり」(Herablassung)としてのロゴス以外に言葉の起源を認めなかったハーマンにとって、人間の自由意志を大前提とするヘルダーの言語把握はまったく許容できないものであった。彼にとっては、人間に働きかける神の側からの力をさし置いて、言語創造のエネルゲイヤはどこにもあり得なかった。E・メツケはハーマンの「語るとは天使語から人間語への翻訳である」との言葉を取り上げ、ここでは「語る」がすべて「聴く」に転換し、語るわれわれ人間は「神の言葉」の通訳者にすぎないとも述べている。この見方をさらにおし進めれば、言語発生のエネルゲイヤとは、あたかも無言の休止符より美しい音楽が湧き出るとく、まさに「沈黙」より発生するものだという解釈も不可能ではない。いずれにしろヘルダーの『言語起源論』を再検討するに際し、このハーマンの警告の声に耳をかたむけることは何にもまして重要であろう。さらに時代が下って「人間不在」と言われる現代、言語への問い

はもっぱら機能的なものに向けられ、「個別科学的な作業」(ハインテル)を追って空転しているとの感が強い。しかし一方、これを補うかのごとく、言語に対するきわめてラディカルな問いも提出されている。新進作家ペーター・ハントケによる完全な無言劇、いわばこの「言語不在」の言語芸術は、いったいわれわれに何を訴えるのであろうか。それは単なる時代風刺にすぎないのか、それとも「沈黙」からの言語創造を狙うものなのであろうか。言語哲学の創始者フンボルトの言語追求すら「人類の精神的な発展」を描出するのみで「言語としての言語」に迫っていないとするハイデッガーの重大な発言は、そのままフンボルトの偉大なる先駆者ヘルダーに対しても向けられるものであろう。もちろんヘルダーの言語哲学に学問性の欠如を指摘するグリムの批判も、これとはまったく別の意味で併せて考慮されねばならない。

(一九七二年二月十三日)

付記

ヘルダー及びハーマンの引用に付した巻数と頁数はズーフアン版ヘルダー全集とヨゼフ・ナードラー編集のハーマン全集(一九四九―五七年)によるものである。

Literatur

- (1) Johann Peter Submlich: Versuch eines Beweises, daß die erste Sprache ihren Ursprung nicht vom Menschen, sondern allein vom Schöpfer erhalten habe. Berlin 1766.
- (2) Rudolf Haym: Herder. Nach seinem Leben und seinen Werken, 2 Bde. (1880-85) Aufbau-Verlag Berlin 1958.
- (3) Friedrich Lauchert: Die Anschauungen Herders über den Ursprung der Sprache, ihre Voraussetzungen in der Philosophie seiner Zeit und ihr Fortwirken. Euphorion I. 1894, S. 747 ff.
- (4) Wilhelm Sturm: Herders Sprachphilosophie in ihrem Entwicklungsgang und ihrer historischen Stellung. Breslau 1917.

- (5) Ernst Cassirer: Philosophie der symbolischen Formen. Erster Teil. Die Sprache. (1923) Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1964.
- (6) Erwin Metzke: J. G. Hamanns Stellung in der Philosophie des 18. Jahrhunderts. Max Niemeyer Verlag, Halle 1934.
- (7) Gustav Konrad: Herders Sprachproblem im Zusammenhang der Geistesgeschichte. Verlag Dr. Emil Ebering, Berlin 1937.
- (8) Hans Jörg A. Salmoney: Die Philosophie des jungen Herder. Vineta Verlag in Zürich. 1949.
- (9) Karl Ulmer: Die Wandlungen des Sprachbildes von Herder zu Jacob Grimm. Lexis I, 2, 1951, S. 263 ff.
- (10) Elfriede Büchsel: Einführung zu: J. G. Hamann, Über den Ursprung der Sprache, Bd. 4 von Hamanns Hauptschriften erklärt, hg. von Fritz Blanke und Karlfried Gründer. Gütersloh 1963.
- (11) Emil Staiger: Der neue Geist in Herders Frühwerk. Stilwandel, Studien zur Vorgeschichte der Goethezeit, Atlantis Verlag, 1965, S. 121 ff.
- (12) Hans Dietrich Irmscher: Nachwort zu: Herder, Abhandlung über den Ursprung der Sprache. 1966. (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 8729/30)
- (13) Wilhelm Dobbek: J. G. Herders Weltbild. Böhlau Verlag Köln Wien, 1969.
- (14) Erich Heinzel: Einführung in die Sprachphilosophie. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1972.

Anmerkungen

- (1) Haym: Herder, Bd. I, S. 436.
- (2) K. Ulmer, S. 270.
- (3) Wilhelm von Humboldt: Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts. Schriften zur Sprachphilosophie, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1963, S. 418.
- (4) Martin Heidegger: Sein und Zeit. Tübingen 1957, S. 167 ff.
- (5) Goethes Werke (Artemis Verlag) Bd. 13, S. 868.
- (6) S. 418.
- (7) Dobbek, S. 97.
- (8) Salmoney, S. 53.

- (9) Büchsel, S. 20.
- (10) Cassierer: S. 95 f.
- (11) S. 25.
- (12) S. 95.
- (13) Bd. 1, S. 155.
- (14) Staiger, S. 157.
- (15) S. 62 ff.
- (16) S. 17.
- (17) S. 164.
- (18) S. 270.
- (19) J.-J. Rousseau: Schriften zur Kulturkritik (Die zwei Diskurse von 1750 u. 1755), Felix Meiner Verlag, Hamburg 1971. S. 161.
- (20) S. 85 f.
- (21) Heintel, S. 139.
- (22) Hamanns Briefwechsel herausgegeben von Valther Ziesemer und Arthur Henkel, Bd. 2, S. 410.
- (23) Metzke, S. 252.
- (24) Heidegger: Unterwegs zur Sprache. Verlag Günther Neske, 1959, S. 246 ff.